

## 『妓者呼子鳥』の後続作品受容

パッローネ  
PALLONE Cristian

### はじめに

パロディ・翻案などといった江戸後期の文学における模倣・後日譚・趣向再利用の例は数多くあり、日本の十八世紀の文学の多様性とそのマルチメディア性を正確に語って呉れる。江戸時代の事件とストーリーなどを設定し、それに一つか複数の新しい趣向を加えて出来上がる、あるいは先行作品のストーリーを広げ後日譚として出来上がる作品は各ジャンルに多数あることは今更言うまでもない。本稿では、いわゆる洒落本という江戸の出版物を扱うことにし、これを基にした「第二次文学」について考えてみたい。

松葉屋の瀬川が鳥山検校に身受けされたことをテーマにした田螺金魚（田水金魚・田にし金魚とも、生没年不詳）作『契情買虎之巻』（安永七年孟春序）という中本は当時世間の物議を醸した人物をフィクション化して会話体とカタリ文体を緬い合わせた大当たりの出版物になり、いろいろな後続作品に影響を与えたケースとして恐らく最もよく知られているであろう。金魚の作品の世界は早くも当年に絵本化され、『吉原語晦日月』のタイトルで再現し、そのパロディである『盲仙人目明仙人』も安永頃に出版されている。さらに、高木氏<sup>①</sup>および鈴木氏が指摘されたように、瀬川と鳥山検校の物語は『虎之巻』を通して、半紙本にも中本にも、歌舞伎の『一曲奏子宝曾我』にも幅広く

受容され、各ジャンルに応じて変身していった。

後日の作品にあまり影響を及ぼしていないと言われている同じ田螺金魚作『妓者呼子鳥』（安永六年刊）の再利用は、『虎之巻』のようにそのストーリーを一括りに拾ったのではなく、作品内の様々なモチーフと叙述単位が個々に拾われて、別の叙述世界に活かされている。本稿では結論らしい結論まで到達することはできなかったが、これから進めていきたい研究の目的として、洒落本の単位はどういうふうに関係しているか、かつ、模倣によってテキストのジャンル帰属関係がどう変わっていくかを考察する。

## 一 『妓者呼子鳥』のプロット

まず、『呼子鳥』のあらすじと叙述単位の構成を山口氏と高木氏の文章を借りて、簡単に説明したい。

日本橋橋町の女芸者で当時の売っ子弁天おとよと、京橋木挽町の女芸者おとみとが露時雨と云う客を中心に恋の葛藤をする。おとよもおとみも共に露時雨に惚れて居た。然るに両者とも、露時雨は自己の独占とのみ考へて居た。そこへ露時雨がおとよが、他の男に転んだとかで切れ文をやったことから、おとよがおとみとの関係を知って、嫉妬の呪を深めて秋葉の社へ丑の時参りをする。おとみは露時雨をしっかりと捕えて居ようとして、露時雨の為ならとて雷義と云う客から金を得るために、腕に彫った露時雨の名を消したりした。折も折露時雨とおとみとの文の交渉の中に立った臥猪が郭での居続けで涉らない。そこへ露時雨は雷義とおとみの噂を耳にして逆上し、遂におとみを刺し殺す。おとみは末期に及んで事の次第を話す。露時雨は自己の軽率を悔って返す刃で自分もおとみの後を追って行く。然るに死んだおとみの墓に夜々陰火が橋町の空から飛んで来る。おと

みの姿が影の様に現れて、おとよを呼んでは許を乞う。それを寺中の浪人が見つけて陰火を切りすてた。その刻に、病昂じて床に就いて居たおとよはあつと一声を限りに死んで行った（新仮名遣い・新字体に改めた）。

五章に分けた、洒落本としては複雑なプロットを構成の面からみると、いくつかの要素が著しく際立っている。それらは、ライバルの客の彫り物を消す叙述と、相手の浮気を知らされることによる嫉妬の叙述である。この二つの叙述単位は三つの女性人物パターンに繋がっている。彫り物騒ぎは手練手管で男を操りだますため嘘八百を並べる女郎と、親孝行並びに貞操の犠牲となる貞女に繋がりが、嫉妬の叙述には、裏切られ、非人間的になる悪女のパターンが内在していると言えよう。筆者の田螺金魚が自叙の結びで言うように、

妓げいしやの所訊しよけん。恋路こいぢの手管てくだ。放蕩者ほうたうものの身みの上話うへはなに（中略）入墨はりものを滅けす貞女ていぢよの操まは。是これを恨うらむるお豊おとよが始終しじうを。ど

うらく肌はだに書かつゝけて。呼子鳥よぶこどりとは。なづけはへりき（洒落本の引用は『洒落本大成』による。以下も同様）。上記の二つの叙述単位はストーリーの流れに重要な役割を果たしているように思われる。特に露時雨の名の彫り物はいろいろな場面に現れ、男主人公の露時雨の「侠」仕立を強調しながら、両方の芸者が彫り物を共有していることとお互いの存在が明らかになる叙述ツールとしても機能する。更に、彫り物の削除の場面は貞女おとみの、露時雨を助けるための手管を語りながら、彼女の最期を迎えるクライマックスでも大事な要素になっている。一方で、おとよの嫉妬の場面は次の段階へストーリーを進め、おとよの狂乱姿から、丑の刻参りの場面を通し、火玉争いのなかで、生きているおとよが死んだおとよを崇るといふ叙述へと徐々に進展していく。

## 二 彫り物騒ぎの趣向利用

彫り物騒ぎにかかわるシーンは洒落本類に頻繁に見いだされる。『妓者呼子鳥』のはその最初期の例の一つで、後

続作品ではこれに因む描き方が多く見られるのである。田螺金魚は、露時雨に貢ぎたい金銭を得るために露時雨の彫り物を消させられるおとみと雷義の場面を「おとみが手管」で描いている。以下、原文を引く。

【らいぎ】 そふいふわけとはつゆしらすに。むり斗ツリいひやした。そのかねわしがかすさかいでほりものけ

してかねかへしさつはりときれさんせトクわいちう女金を出し廿両おとみにわたす 【とみ】 御しんせつはわすれやせぬ。かねさへかへせば

とう成とも 【らい】 サア 金かしたうへからはほり物をけしたもトのつひきさせすもくさをとりよせ。手をとらまへてけすほり物 (中略) トすゆるもぐさのやけ入るもろ

しうがためとしらゆるおとみ

深川を舞台にした蓬莱山人帰橋著『富賀川拜見』(天明二年序)は、女郎の手練手管を穿つ中で、間夫の伊之助を維持するため客を騙す女郎を登場させる。この女郎は客への真心の証拠として伊乃介の彫り物を消し、客からお金を手に入れるのである。次の引用に見られるように、この場面の描写は金魚の言葉を直接借りてはいないが、間夫のためだと思つて自身を慰め痛さを堪える女の肉心的葛藤にハイライトが当てられる点が共通しており、貞操の女と手管の女が重なる描き方が両方の作品に用いられる。

【おたよ】 どれほどにいゝなすつても。其金はかりは貰はれやせん。十は少し腹立声ニテ 【客十蔵】 金を貰ふがいやは

聞へた。年を。入ておれが所へ一年おそくくるが嬉しひか。【た】 重々そふいふ事しやアねけれどもどふも訳

がすみやせん 【十】 十両出すも勝ツ手づくだそれをあんしる事はねへしかし伊之字のいかさはいやだ 【た】 な

る程口で斗リいつても。おめへの心もすみやすめへ去年中ぎりづくで。おるんさんにはつて貰つた此ほり物も

けしやせふと左の手をまくればかすかに伊のとわきの下に有ければはしめてきもをつふしけれとも 【十】 けさふともけすめへとも。あつひめは御勝手次第さ 【た】 そ

ふいわれてけしかねる物か。【十】 もぐさが無くつてお仕合 【た】 おせいさんに 【十】 げへぶんかわりひ 【た】

そんなら仕よふか有ルとはなかみをももくさのようにし。伊のとほりたる上にすへる。心で十両にていゝわけをせんとおもひ。あつさをこたへやきけてしまふ 【十】 今まではもしやとゑんりよした

がとてもの事に右の手も見せてくれる

はつとおもへと今さ  
らいやともいわれず

〔た〕 右の手も今けしやす

とまくり是も  
けして仕まふ

同様の描き方は式亭三馬の『石場妓談辰巳婦言』（寛政十年春序）にもみられる。以下、原文を引く。

段くくりつにのほせてくればおとまほうぬが  
あつはへもち込み心の内では舌ヲ出して

〔女郎おとま〕

そふい、なはる程どふも其金はもらはれやせん

〔客藤兵衛〕

其はづよ金ヲ遣はせねへつらでやつぱり引込のがいやでもあるし又喜之が方へのつらもたつめへ

〔と〕 そり

やアおめへ愚痴ッぽひ今も咄た訳合だからどふも心がすみやせん

〔藤〕

すまぬ心の内にもしばしだ何でもすつ

ぱりつき出すといふ證據を見せやな

〔と〕

證據といふはマア此彫物をけして仕舞ふ

〔藤〕

笑ひをか  
くして そりやアど

ふとも勝手にしる。しかしそいつをけすにはろせももかけずは行くめへ

〔と〕

きついしやれさそふいわれて

けしかねるものか

ト兼て用意の枕の引出しより切女あつきは女郎のつらのかわ切火はえんくと立のほるにおとまは是  
も金ゆへと口の内には唱名（せうめう）ならて十兩くととなへながらすつぱりとすへけてしまふ

〔と〕

ヲ、あつかつた

サアよく見なせへし

〔藤〕

ト前へさ  
し出す ム、よし／＼違ねエの真中だ。夫ですつぱりとわかつたが。ついでにそつ

ちのうでを見せや

〔と〕

うでを  
まくり しらきてふめんだヨよく改めてみなせへ。

三馬は明らかに帰橋が描いた場面から剽窃しており、作品の構造自体は天明の洒落本に由来する。次に二年後に出版された『大磯親話風俗通』（松風亭如琴著、寛政十二年春序）のケースを分析してみたい。この作品では彫り物騒ぎの構成が逆転され、女郎は間夫の半九良によって、ぎりづくで客文長の名を彫ったところを消される設定になる。ただし、文体上、文長が自分の名をお染の腕に彫るシーンは『妓者呼子鳥』の雷義とおとみのシーン、『富賀川拝見』の十蔵とおたよのシーン、『辰巳婦言』のおとまと藤兵衛のシーンから部分的に剽窃し、カラージュのようにいろいろなテキストをなймаぜに使っている。

〔場面一〕

〔お染〕

おめへの名ヲほりやしやうからそれてこふしやうなせへやし

〔文長〕

少々うれし  
くなつて それが実な

らとれマア手をあらためてみよふサアたしたり

トお染か手  
をまくり

是一ツけし口か有ぜそつちを見せてくれ

〔染〕

くつ  
とま

くつて目 先へたし サア見なせへこつちの手はやばなしのしらきちやうめんさ

〔文〕 (中略) ト右のうてヲ  
まくつて出す

〔文〕 笑ながら墨をすり  
なかしお染か右の

うてに文長とかきはりを三本ほどにてまきほつてやるお染は文長かまへうでヲだし目をねふりわ  
きをむいて是ともみなしかけをこしらへさせんという山があれは半九良かためとしんほうしている

こうやつた身はきつい女の関羽といふ身だせ

サアく御ちうもんの通りにすつはりてきあがつた是てこそてめへの心がわかつたといふもんだいきつきにあ

をらねへか トつちやわんへ  
酒ヲつきのませる

〔ソメ〕 くつとひといき  
にのんでしまひ

ア、せつねへ文長さんおめへの名ヲこふうでにほるからにやア

わたいか心がすつはりさわかりやしたろうね

〔文〕 ウ、わかりにかけて拾匍ちけへねへのまん中た

〔染〕 き

つしいやれさ。

(場面二) 〔半九良〕 おめへの手てかいてほつてくんねへそうすりやア此うへ何もうたかふ事はねへ

〔染〕 は氣もつ  
かすに

それほどまでにおもつてくんなはるはうれしいよそんならほつてあけやしやう

〔半〕 ム、ほつてくんねへと

はなかみ袋より針  
をたしてわたす

〔染〕 硯箱すりばこを持てきやしやうと

たつて行半九良はちうもんとふりと心によるこひた  
る所へす、り箱をもちきたり半九良かまへにすわり

おめへほんとうにほんなは

るか 〔半〕 しれた事た

手ヲまくつてたすとお染は半九良か手にてまいの名ヲかき  
狂言とはつめしらす何心なくほらんとせし手ヲおさへて

〔半〕 コウ真実しんじつほつてくれる氣か

〔染〕 なせ

そんなことをいゝなはるたゞしいやになんなはつたかへ

〔半〕 いやにやアならねへかしんしつほつてくれる

氣ならそつちのうでの文長とほつたヲけしてくれ其かわりにはおれかほるいかにつかいころなひたらでもそふ

こけにやアまはされめへ (中略) 〔染〕 いやたかなしいくやしいとおもひなからにほつた物ヲおめへにみかへて

した事のおもひなはるがこんなふぎりも金ゆへにした事でござへすこふいふからはかくごのまへ此ほり

物ヲ今けしておめへのかほのたつよふに文長さんをつきだしやしやうそれでかほのた、ねへ事はござへすめへ

トあんとうの引出しよりきりも  
くさを取だしすへげさんとする

〔半〕 すこしは心もわかつたな  
れとわざとはりつよく

けすともとふともかつてにしろ (中略)

〔染〕 いさゝか  
まわす ア、あつ

いそ 〔半〕 あついくといつてもてめへのつらのかわよりあつくは有めへ

〔染〕 わりいしやれさ トすへけして  
しまひ半九良

かめさきへうて おめへのめへてこふすへけしてしまふからはモウかんにんしてくんなせへし。

間夫の半九良が彫り物を消すシーンは上記のシーンのほかに、帰橋の『愚人贅漢居続借金』（天明二序）のおことと燕十の会話からも借用している。<sup>(4)</sup>『富賀川拝見』に登場する女郎は間夫を助けて客を騙すというキャラクターで、『妓者呼子鳥』の女郎の二重設定をユーモラスな叙述の中で表面的に借り次ぐのであるが、後者の作品等は寧ろ深川女郎の意気地を中心にその心境を強調していると言えよう。

### 三 火の玉の描写

『妓者呼子鳥』は、『虎之巻』のように、早くも安永期に絵本化されている。『弾的東風俗』が最初で、次に『芸者呼子鳥』が現れる。後者は剽窃に近い部分があるが、叙述展開の仕方でも、おとよの狂乱と丑の刻参りが詳細に描写されたのに、結局おとよの登場がそれっきりで結末に姿を現さない。それに対して、前者は人物の名前やセリフなど、細かい点を一々書き換え、ストーリー性があり、本作のエンディングもそのまま絵画化し、黄表紙には相応しくない悲劇的な結末の後に、おとよの追善のために若い町芸者が集まり、一人が踊るといふ場面を加え、目度い結びをつけている。彫り物騒ぎの譚は両方の作品に本作のままに語られているが、火の玉の争いは、絵本の『芸者呼子鳥』には無く、『弾的東風俗』では独特な描き方がされている。

洒落本の『妓者呼子鳥』の作品では次のように火の玉が描写されている。

時うしみつる頃おいに。夜なくもゆるおとみがかはら。陰火の中いんくわにわゝたる泣声なみこゑ（中略）。らう人ありかのなき声こゑのいふかしく。しさいそあらんとうか、へば。風せやく々物すこくめめずもしらぬしんのやみ。手まりほとなる一ツの丸たまき火。橘たちばな町のそらよりとび来て。おとみがつかにおちるとみへしが。陰いんくわたちちまちもへあがる。中におとみすがたかげのごとくにあわれて（中略）まつこうにさしかさしておとみをなやます心こゝろく

わの玉を。まつ二ツにきりくだけば。左右へ。はつとぞきへにけり。青きほのほももへやみて

橘町の空から飛んで来る毬の形をしている陰火が青い炎の中のおとみの姿を苦しませるといふ場面を描くのに対して、鳥居清経（生没年不詳）の絵では二つの火の玉が空を飛んでいるところを浪人が刀で打ち切ろうとしているシーンが描かれている。この描き方の由来は当年、同じ金魚作の『傾城買指南所』の一箇所にも窺える。

アノおとよと。おとみが。互のしつと。火の玉となつて。そらでくひあひ。地におちたといふも。中洲であげた。玉火だといふ事だ。

玉火を見誤つて、二人の芸者の魂が火の玉になつて争つていたという偽りのニュースが町の人々の間に駆け巡つたというのは、弁天おとよとおとみの恋の葛藤は当時物議を醸した事件であつたと思わせる文章である。長沼氏の説によると、それは歌舞伎の歴史に重要な位置を占める『戯財録』にも見られる、人の噂の嘘説と内証の実説を合わせた書き方なのである。

『呼子鳥』の一つの原点である平秩東作（一七二六―一七八九）の『怪談老の杖』（宝暦年間序）中の怪談「生霊の心得違」は、火の玉になつた嫉妬深い女の生霊が夜な夜なライバルの墓へ空から飛び入り、「ごとくどろくと人などのくみあふ様なる音」がして暫く、「かの光りとび出て帰り候」と語られている。編集者の東作によると、享保年間の事件だそうである。

実は、同じ安永頃にこの類の奇談はもう一つあり、流行歌などにその面影が窺える。作家の鼻山人は『廓雑談』（文政九年刊）という中本の冒頭にこう記している。

昔廓の時花唄にへきぶねにあらぬ黒介のいなりのやしろおどろかししんゐをもやす鉄輪の火てらくくと鏡床にしんくの房のうつくしく顔はたがひの緋ちりめん



数多屋逸麿、その妻と、妾の中近江屋花里という当時噂になっていた三角関係を語る唄である。嫉妬に狂乱した遊女の花里は呪いを深め、火の玉となりライバルを苦しませた話がある。ちなみに当時の女郎が火の玉に変身した噂は松浦静山の随筆『甲子夜話』巻之一にも見られる。

おとみとおとよについては、当時の資料で、ライバルであったことがわかっているが、上記の『傾城買指南所』以外は奇談の言及はない。

#### 四 嫉妬深い女郎の趣向利用

『妓者呼子鳥』の発刊から二年後に、同じ小本の形で『隣壁夜話』（安永九初春序）が出版される。五つの短編怪談話を集めたこの作品は洒落本のフォーマットを使いながらも、初期読本的な雅文体で書かれている。講談『小夜衣草紙』の出典とされた第一話「京町の人魂」には色に耽った若侍の佐太郎が馴染みの傾城の立花を裏切り、御頭の娘と結婚することになった時、立花はそれを知らされ、嫉妬で狂乱して自殺し婿嫁を祟る。佐太郎の二人の友人が傾城立花と縁切話する場面はこんな具合である。

わけに訳をかさねて申ければ其時立花火鉢にあたりいしがハアツトいふてうつむき火箸を杖につきしばし物もいわずいたりしま、そばより兩人「是くさ様に取のぼせてはあしかりなん先、心をしづめ給へ」とゆすりければ立花は顔ふり上、「残念なる」と云てうしろにありし箆筒の紋どころは佐太郎が紋付しが其紋所へ火箸をくさと突立けり立花顔色口ならず恐しや火箸根本までつつ立たり

『妓者呼子鳥』にも同じようなシーンがある。原文を引く。

とくくよりおとよはかみさか立。身におぼへないむりいひかけて。おとみにみかへてきれ文かだまされしか

さんねんなど。年ふれは石となるくすのきのとこばしらへひばちの火ばしさか手ににきりエ、くちおしいとはざりなせばくだんの火ばしはくすの木の石のはしらへ八寸ばかりさしとをしける

『隣壁夜話』の第四話の「生壺死人をうらむ」も『妓者呼子鳥』の最終章と同じ趣向で、両方とも『老の杖』に因むと考えられる。

安永期の作品群と文政期の『廓雑談』の間に、『壺董』（寛政六年刊）という半紙本とその改題本群がある。『壺董』の話の典故として先行研究で様々な作品が挙げられているが、傾城勝浦の嫉妬の激発を語る場面と火の玉の現象が起こる場面では、やはり『隣壁夜話』と『妓者呼子鳥』の影響が強いと言えよう。大橋氏が指摘されたように、前者の挿絵にも共通点が確認できる。そのシーンは次のように描写されている。

今までとはやうかはりて、そともを見出したる目のうち血ばしり、齒のをときりくとなりて、またうしろのかたをふりむき、平次郎が紋のつきたるたんすの金物へ、手に持居たる火箸をはたとつきたつれば、壹尺あまり有けるか、なかばを過つらぬきたり。

さらに、『壺董』は半紙本でありながら、会話の部分が多く、写実的とは言えないが、しつとりとした恋人同士の会話、痴話げんかなどといった洒落本的な要素もあちらこちらに用いられている。文政六年に再版される時に『奇談情之二筋道』という寛政期洒落本めいたタイトルが選ばれたのもそのせいであろうか。木越氏が明らかにした通り、その前の寛政九年に、もう一つの改題本が、実話的な要素を生かしたタイトルの『怪談「コノゴロ」草紙』として既に現れた。

## まとめ

そもそも洒落本から叙述単位を得た非洒落本のテキスト群は洒落本の場面を借りて、その叙述を広げ、長編化したものと言えよう。長編化とは、つまり前後の事柄を述べたり、主人公の設定を複雑化したり、物語を深化したりする方法で逸話と短編から長編を編みだすことを意味する。例えば、『壺葦』を著わした源温故は『隣壁夜話』と『妓者呼子鳥』の怪談話を切り抜いて、そこから抜き出した人物等に前日譚や後日譚を振り分け、シンセシスによるカタリをアナリシスによるカタリにし、本ストーリーに絡む副次的なストーリーを展開させることによって、長編を作ったのである。このやり方は短編から舌耕文学のハナシへの相互様式変換、つまり違うメディアへの変換に非常に近いように思われる。<sup>12)</sup>例えば、『隣壁夜話』の話から講談の『小夜衣草紙』、怪談噺の『怪談江島屋騒動』への相互様式変換は『壺葦』が行う先行文学の再利用によく似ている。またこれらの例を文体とジャンル帰属の観点から見たら、やはりハイポテキストの影響が見いだされる。例えば、怪異小説の『壺葦』は対話の利用など洒落本的要素を文体の面にも取り入れて、そのジャンルのスタンダードから離れるが、その一方で、青本の『弾的東風俗』や『廊雑談』のような中本は怪談話を借りることにより、それぞれのジャンルのスタンダードを超えるのである。

このように、『妓者呼子鳥』の叙述単位の歩みを探りながら、周知の江戸文学の間テキスト性を改めて検証することによって、叙述の様式内変換、かつ相互様式変換は既成のジャンルの境界を希薄にして行くが、これは同時に江戸文学のジャンル自体の再考を促す契機にもなるであろう。この点は本研究のフォーカスではあるが、これから更に深い検討が必要である。

『妓者呼子鳥』は後続作品にあまり影響を与えていないと言われるが、貞操の女郎を中心にその叙述に現れる人物やエピソードが十九世紀の大衆文学に頻出する点などを踏まえた上で、その評価を考え直す余地があるように思わ

れる。

【注】

- (1) 高木元『江戸読本の研究——十九世紀小説様式攷——』（ベリカン社、一九九八年六月）。
- (2) 鈴木圭一『中本研究——滑稽本と人情本を捉える——』（笠間書院、二〇一七年二月）。
- (3) 高木好次・山口剛「解題」、高木好次「他」編纂『洒落本大系』第二卷（六合館、一九三二年九月）より。
- (4) 『人贅漢居続借金』のシーンは『洒落本大成』第十二巻二九頁を参照された。
- (5) 長沼孝史「芸者呼子鳥」について」（『緑岡詞林』五号、一九八一年）及び棚橋正博『黄表紙総覧』前編（青裳堂書店、一九八六年八月）を参照された。
- (6) 長沼孝史、同右。
- (7) 国書刊行会編『新燕石十種』第三卷（国書刊行会、一九三二年二月）による。
- (8) 山崎薫「解題」、高木好次「他」編纂『洒落本大系』第三卷（六合館、一九三二年二月）による。
- (9) 大橋咲紀「初期江戸読本『壺董』と『隣壁夜話』」（『あいち国文』二二号、二〇一八年）。
- (10) 引用は大西洋司・近藤瑞木編『初期江戸読本怪談集（江戸怪異繪想文芸大系、第一巻）』（国書刊行会、二〇〇〇年十月）による。
- (11) 木越俊介「奇談情之二筋道」について——読本改題本と人情本——」（『山口県立大学学術情報』一号、二〇〇八年）。
- (12) 用語はジェラルド・ジュネット著、和泉涼一訳『バランプセスト——第二次の文学——』（水声社、一九九五年八月）による。

\*討論要旨

山下則子氏は、『妓者呼子鳥』の描く売れっ子弁おとよと、女芸者おとみのことについて、要するにどの部分が事実で、それがどのように作り直されていくのかということをも、もし明らかに出来るのであれば、さらに興味深い話になったのではないかと思う、と指摘した。昔、『追善草双紙』を研究していて、やはり同じように、同じ話が何度も使われるという作品で、結局どの部分が事実で、それがどのように作り直されていくのか、調べるのが難しい作品である。『妓者呼子鳥』の趣向自体も、それより前に何か古典があるのではないか、という気がする。それをどういうふうに作り直して、どういうふうに派生してジャンルを飛び越えていくのか、ということも明らかにしていただければ、と感想を述べた。

木越俊介氏は次の点を質問した。整理すると、前半の彫物騒ぎの趣向の利用というお話と、後半の火の玉争いはレベルが違うのかなと思う。両方大事な点だけれども、彫り物騒ぎは趣向として洒落本を中心に展開されていく、対して後者は、いろんなジャンルの境界線を越えていくことがとても重要だと思う。火の玉の描写について、嫉妬深い女性というモチーフも入るけれども、『妓者呼子鳥』の典拠という扱いかたでいいのか、ということがひとつある。特别的なのは、生きた女性から魂が抜けて出て、死んだ女性の墓に行くというのとはちょっとめずらしいのではないか。そこは他の『隣壁夜話』と『壺董』と

も違うようなので、その独自性をどうとらえるか、を一点目に質問したい。そして作品のなかに、本当はこうだったんだけれども、男には違うふう  
に伝わったり、女性のほうにも違う情報として伝わったりして、痴情のもつれになっていく、近松とかにもあるのかなと思うが、先行作品のなかで『妓者  
呼子鳥』に影響を与えた作品があるとすれば何にあたるのか、というのが二点目に、教えていただきたい、と質問した。

発表者は、次のように回答した。元禄年間からの奇談、奇談集を読む作業をしているが、資料が多すぎて発表には間に合わなかった。例えば今まで、  
生き霊が死霊を祟るという出典が、大田南畝が書いた注記も載っている、平秩東作の怪談本『老の杖』だと今まで言われているが、実は例えば奇談集を説  
んでいると、『驢鞍橋』のなかにも、火の玉、生きている妻が、死んだ前の妻を祟るといふことについての考証もある。そのためこういう話は前からある  
のかもしれない、たとえば『今昔物語集』にも似た話がある。もちろん近松門左衛門でもある。もっとも、劇でも勘違いして悲劇が起こるといふ叙述ツール  
は結構頻繁に用いられているので、世界共通の語り方かもしれない。今日の発表のなかでは、題名を並べただけかもしれないが、そもそも発表の目的は、  
種明かしというのではなくて、問テキスト性によってどのようにジャンルの超越が起こるかということに注目したかった。そこでふたつの例をあげた。ジャン  
ル内の叙述単位のとらえ方でそれを説明するために彫物話を、いろんな洒落本の中で同じ話が同じように取り扱われたということを示し、そして  
ジャンル外のとらえ方はどういふふうになるか、という点についても一応ふれてみたと述べた。

中嶋隆氏は次のような見方を提示した。趣向について注目されたということは、近世文学の本質に関わるようなところで、大変興味深く発表を聞かせて  
いただいた。かつて長谷川強先生が、浮世草子の八文字屋本全集を作るときに、何を趣向としてつくるのか、梗概探るだけじゃいかん、あらすじは問題な  
い、趣向をとることが大切なんだ、ということを非常に強調されていた。お芝居とか、浮世草子の趣向、あるいは他のジャンル、単に散文作品ではなくて  
芸能方面のほうでもいろんな影響があるし、演芸のプロパーの方が、浮世草子から趣向をとった例があるということを抑らなかつたけれども、そういうこ  
とも多々あるわけである。だから問題は、何が趣向なのかということ、それに尽きるところ、つまりその趣向の最初の作品はどれなのか、ということであ  
る。いま『驢鞍橋』の人魂のところを例にあげていたが、鈴木正三の慧中という門弟が、閉書を残している。これは寛永年間のことだから、『呼子鳥』の  
成立から二〇〇年前くらいになるわけで、だからそれごととったとは言い難い。人魂という事象は、鈴木正三というのは、浅井了意とは違うわけで、実際  
自分の体験したことを記録していく人である。『驢鞍橋』というのはほとんど言行録、鈴木正三がああ言ったこう言ったのを記録しているが、ほと  
んどは文芸レベルではないんです。だから人魂がそこに書かれているからといって、『驢鞍橋』がその趣向の、最初の作品だとは言えない。そのあたり  
のところを厳密に、お考えになるとか。何人かの先生が仰っているが人魂の例はたくさんあって、しかし嫉妬した女性が生ききているうちに人魂になってと  
か、そういうのはひよっとしたらこれが早いかわからない。彫物そのものは色々あるんだけれども、それがきっかけになって軋轢がという、それもひと  
つの趣向かもわからない。ですからお芝居も含めて、広く趣向ということをお考えになったほうがいい。たしかに文字テキストからいうならば、それで  
ジャンルの区別というのがされているかわからない。ただし我々がジャンルという場合、決してテキストだけではない。本の書形だとか、出版の形態  
だとか。いうことも含めてジャンルということも考えているので、そこも視野に入れていただいたらいいのではないかと思う、と述べた。

発表者は、『妓者呼子鳥』の面白いところは、当時の実話と先行文学から得た趣向が混ざっているのだ。実話に基づいた話だということですが、実際に  
何が起こったかわからず、『驢鞍橋』を出したのは文学レベルの趣向としてではなく、二〇〇年前からも同じような都市伝説があったということを私は  
聞いたかった、と回答した。

